

原著

# 初等英語教育における協同学習

## — 先行研究のレビューを通じた考察 —

橋元 知子<sup>1)</sup>

### Cooperative Learning in Elementary English Education: Implications From a Literature Review

Tomoko Hashimoto

#### 要 約

本研究は日本語で書かれた先行研究のレビューに基づき、初等英語教育における協同学習について調査した。初等教育現場においてグループ学習は頻繁に使用される活動で協同学習として語られることが多いが、協同学習と呼ぶには一定の条件を満たす必要がある。本調査ではJohnson and Johnsonによる協同学習の5要素を説明した後、CiNii Research で初等英語教育における協同学習について書かれた論文を検索し、分析した。考察から、これらの研究では初等英語教育の協同学習について概ねポジティブな結果が得られており、2つの共通点があることが分かった。1点目は協同学習を実施する際に守るべきルールを児童に提示していることである。2点目は児童の個人差について考慮する必要性を明らかにしていることである。よって、本研究から、初等英語教育で協同学習を実施する際には、これらの点をふまえた実践的な活動を考える必要性が示唆され、将来に活かせる知識を得ることができた。

キーワード：初等英語教育、協同学習、実践、個人差

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 はじめに

平成29年告示の小学校学習指導要領により、令和2年度から日本の小学校において外国語活動が小学校3年生から、外国語科が小学校5年生から全面的に実施された。外国語とはなっているものの、これは国際社会でコミュニケーションをとる手段として必要とされている「英語」である。全国的に見てみると、小学校1年生など、国の規定よりも早い

段階で英語の導入を始めている小学校も多い。外国語活動の目標には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」を育成することを目指すと書かれてある（文部科学省，2017）。また、このために「自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う」（文部科学省，2017）ことも目標に掲げられている。小学校5年生からの外国語はこれらの言語活動に、読むこと、書

1) 橋元 知子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University)

くことを加え、コミュニケーションをとる基礎となる資質・能力の育成を図っている。周知の通り、コミュニケーションは相手が居なくては成り立たない。更に、学習指導要領には学校教育に求められていることとして、子供たちが社会の変化に積極的に対処し、他者と共に課題解決を図る能力の養成があげられている（文部科学省，2017）。よって、小学校英語教育で子どもたちが周りの児童と交流しながら学習することは大切だろう。学習活動において他者と関わり合いを持ちながら学ぶ一つの方法として協同学習（cooperative learning）があげられる。協同学習はグループ活動とは似て異なるものであり、Johnson and Johnson（2009）を始めとし、調査されてきた。本研究では、まず Johnson and Johnson（2009）が提唱する協同学習の定義を示し、これを実施することの利点について述べる。その後、日本語で書かれた先行研究をレビューすることで、初等英語教育における協同学習の実践例を検討し、授業で使える情報を得ることを試みる。

## 1.2 研究目的

本調査の目的は、協同学習について概説したのち、先行研究から初等英語教育における協同学習を検討し、将来の授業実践に活かせる知識を得ることである。

## 2. 協同学習

### 2.1 定義

協同学習（cooperative learning）の理念は古くからあるが、最も有名なのは、David W. Johnson と Roger T. Johnson の兄弟によって提唱されたものである（Yang, 2023）。彼らによると協同学習とは、学習者が協力して自分自身とお互いの学びを最大化するための小集団の教育的使用である（Johnson & Johnson, 1999）。協同学習は、学習者が共有する学習目標を達成するために共に助け合う必要性を重視する。根底にあるのは、学習は潜在的に社会的なものであり、小集団で共に学ぶことによって大きな利

益が得られるとする考えである。Johnson et al.(1991)によると、学習者がグループで活動することが自動的に協同学習になるのではない。このような活動が協同学習となるためには5つの要素が満たされている必要がある。この5つの要素とは、積極的相互依存（positive interdependence）、個人の責任（individual accountability）、促進的相互作用（promotive interaction）、対人スキルと小グループスキル（interpersonal and small group skills）、そしてグループ改善の手続き（group processing）である（Johnson & Johnson, 2002）。

#### 2.1.1 積極的相互依存

本要素は、学習者自身の成功が集団全体の成功と結びついていることを意味する。すなわち、自分一人で目標を達成できるわけではないことを理解していなければならないことである。これによって集団の構成員は相互的な責任と共に、集団に対する説明責任があることを認識する。

#### 2.1.2 個人の責任

集団として同じ目標に向かって共に努力する中で、個々人の構成員は自身の貢献と学習に対しての責任を負う。これにより、他の人がした仕事にタダ乗りすることができない環境が整う。

#### 2.1.3 促進的相互作用

学習者は互いを励まし合い、支え合いながら、学習に向かう姿勢を高め合う。これは、資源の供給、相互理解、成果支援やフィードバックを提供することにより、成し遂げられるとされている。

#### 2.1.4 対人スキルと小グループスキル

協同学習が成功するためには互いにコミュニケーションをとる必要があり、また、集団内で生じた紛争を解決し、リーダーシップを取る能力が必要である。これらを上手く活用することで集団が円滑に機能する。

#### 2.1.5 グループ改善の手続き

定期的に集団が機能しているかどうかを振り返り、小集団の構成員が各々として、そして集団として、何を改善できるかを考察する。この際、有益であっ

たこと、また、有益ではなかったことについて話し合う。そして、将来の集団活動をどのように改善すべきかについて計画を練る。

## 2.2 協同学習の利点

協同学習がもたらす良い点については、多くの研究者が確認している (e.g. Gillies, 2007, 2016; Hashimoto, 2020, 2022; Hashimoto & Kashimura, 2023; Jenkins & O'Connor, 2003; Johnson, 2008; Johnson et al., 1993, 2000; Slavin, 1999; Stevens, 2003)。例えば、Slavin (1999) は、協同学習を、近年の最も素晴らしい教育的改革だと称え、Stevens et al. (1987, 1991) も、教室での学習において協同学習は最良の方法であると述べている。そして、Carlsmith and Cooper (2002) は、協同学習では、学生はより積極的に関与し、より多くを学ぶという理由で、伝統的な指導法よりも効果的であると主張している。また McCafferty et al. (2006) は、協同学習は高次の思考、異なる民族集団間の関係、自尊心、そして成果にプラスの影響をもたらすと述べている。McCafferty et al. (2006) に一部類似する点も含む Jacobs et al. (2002) のリストは、協同学習の学習者へのメリットとして次の11個をあげている。

1. 学業の向上
2. 学業に対する関わり増加
3. 学習への興味の上昇
4. 自己学習に対する責任感の高まり
5. 民族間の関係改善、及び、学業に困難を抱える人への受容態度の向上
6. タスク完了までの時間の短縮
7. コミュニケーションスキルの上達
8. 学校についての好意の進展
9. 自己および仲間、学校、学習に対する態度の改善
10. 様々な視点や思考方法に対する理解の進歩
11. 教師が学生を観察し評価する機会の増加

(p. xi)

このように学習者にとって幾つもの利点をもたらす指導法として、協同学習は多くの研究者から支持されている。

## 3. 方法

本研究では、初等英語教育における協同学習の実践例を CiNii Research で検索した。CiNii Research とは、国立情報学研究所によって文献情報を検索するために使用されているサイトである。以前は CiNii であったが、「オープンサイエンスの考え方が浸透し、文献だけでなく研究データやプロジェクト情報など、研究活動に関わる多くの情報が公開される傾向」(CiNii Research, 2024) をふまえ、「文献だけでなく、外部連携機関、機関リポジトリ等の研究データ、KAKENの研究プロジェクト情報などを含めて、シンプルなインターフェースから気軽に横断検索すること」(CiNii Research, 2024) を可能にするため、CiNii Research が公開された。これは全分野の学術論文、研究プロジェクト、本、雑誌、研究データ等の種別の28個のデータベースを収録している。本研究では、他国ではなく、日本国内で実施された初等英語教育における協同学習の実践例について、日本語で書かれた論文を調査した。これは、初等英語教育で協同学習を実施したいと教員が考えた際、読みやすく、学習が容易であり、直ぐに現場で応用できると感じる先行研究の方が、将来の実践に活かせるのではないかと考えたからである。Table1 はフリーワード検索で使用した単語、及び、ヒットした数である。検索に使用した単語について、「協同学習」(cooperative learning) と「協働学習」(collaborative learning) は本来違うものだが、混同して使用されることも多いため「協働学習」でも検索した。また、「グループ」学習と「協働学習」も異なる点があるが、こちらも同義語として使われることも多いことから、「グループ」という単語でも検索した。

Table 1

**CiNii Research の結果**

検索に使用した単語	ヒット数
初等 英語 教育 協同学習	5
初等 外国語 協同学習	2
小学校 英語 教育 協同学習	18
初等 外国語 協働学習	3
初等 英語 教育 協働学習	7
小学校 外国語 協働学習	16
初等 外国語 教育 グループ	10
外国語活動 グループ	31

この中から、研究プロジェクト、本、雑誌、研究データ等ではなく、論文であり、調査対象者が主に小学生の実践研究の事例のみを調査したところ、該当するものが4つあった。このため、次節ではこれらを取り上げ、将来の実践に活かせる情報を検討する。

## 4. 結果

### 4.1 小学校外国語活動における内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と可能性 (2013)

この調査は外国語活動と他教科を組み合わせる内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning: CLIL) を導入することで、授業内容の充実、及び、指導法の探究をはかり、CLILの実現可能性と潜在力を検討した。CLILとは、教科の内容 (content) の学習と外国語 (language) の学習の両者を統合した教育方法である (Coyle et al., 2010)。

全国の公立小学校5校において、10時間CLILの実践授業を行い、このうち4校ではCLILを導入していない通常の外国語活動と比較した分析を実施した。CLILの質は4つのCを遵守することで守られるとされている (池田, 2011)。これらは内容 (Content)、言語 (Communication)、思考活動 (Cognition)、国際理解・文化/協同学習 (Culture/Community) であり、CLIL成立の要件として協同学習の要素が含まれていることが分かる。調査対象者は、これらの小学校における外国語活動の主導指導者5名、ALT 4名、児童 (小学5、6年生) 208名だった。測定材料として用いられたのは3点である。1点目

が授業観察、2点目が児童への質問紙調査 (児童に対する質問項目は、Dörnyei (2010) を基に Yamano (2012) が作った回答選択式項目と回答記述式項目を含めたアンケートに、英語と異文化理解を使ったコミュニケーションへの意欲に関する項目を加えたもの)、そして、3点目が授業実践者へのインタビューであった。インタビューが難しい場合は、授業実践者への質問紙調査で代替した。分析の結果、外国語活動におけるCLIL授業の実践が可能であることが確認された。また、実施することによる影響として5つの事柄の促進が示唆された。1つ目が指導者 (特に担任教諭) の知識と経験を活かし、児童の興味や知的レベルにあった内容の充実。2つ目が、多様な文脈の中で学習言語に親しみ、児童のコミュニケーション活動への積極的な参加。3つ目が、児童の知的レベルを配慮した思考活動の利用。4つ目が、協同学習の質の改善。そして、5つ目が文化・国際理解の体験的な学びである。また、課題点としては、CLIL実践における使用言語と教材作成の難しさが挙げられた。総合的には、CLIL実践の継続的な検証の必要性が示された (山野, 2013)。

### 4.2 協同学習による向社会的スキルの育成に関する事例的研究：外国語活動に着目して (2019)

この論文は協同学習の理論に基づいた外国語活動への影響を調査したものである (丸山・赤坂, 2019)。特に「向社会的スキル」(友達への援助や、友達との関係を作るスキル) の育成に焦点を当て、その過程を明らかにすることを目的とした。丸山・赤坂 (2019) は介入として、「リアクションのスキル」の指導と、友達との関わりに対する望ましい態度のフィードバックによる教員の価値づけを授業に取り入れた。調査対象者は小学5年生2クラス (1クラス21名) で、介入回数は週1回の授業を6時間、平成29年6月から7月にかけて調査した。そして、Hi Friends!を基に協同学習の理論に基づいた外国語活動を展開し、効果を測定した。測定には4つの材料を用いた。これらは、栗原・井上 (2010) の学校環

境適応感尺度「アセス」の6領域 (ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres) のうち第V因子の向社会的スキル、児童の振り返りシート、授業記録からのエピソード分析、そして、インタビューである。介入前の「向社会的スキル」を元に、児童を下位層、上位群に分けてデータ分析したところ、介入後、元々下位層の児童の向社会的スキルは有意に上昇した ( $p < .01$ )。また、先行研究や教員インタビューから、上位群にとって、スキル指導はやり取りが形式的になり、特定の方法を使用しないといけないことから、制限がかかる可能性があることがわかった。このことから丸山・赤坂 (2019) は、上位群の向社会的スキルの育成には児童のニーズや実態に即したリアクションスキルの導入や授業内容の検討が必要な可能性について言及しており、その過程を明らかにしている。

#### 4.3 学校外国語活動・外国語科の「話すこと [発表]」

における児童のコミュニケーション能力の向上—  
コミュニケーション能力の明示的・暗示的指導、  
ペアやグループによる相互評価および協同学習  
に基づいて— (2023)

荒井ら (2023) による調査では、協同学習の5つの基本的構成要素、コミュニケーション能力の暗示的、明示的指導、ペアやグループによる相互評価を授業に取り入れ、話すこと [発表] におけるコミュニケーション能力 (方略的能力と社会言語学的能力) がどのような影響を受けるのかを調査した。対象者は小学4年生と6年生の児童だった。研究では、児童に発表の良い例や、改善すべき例を提示したり、彼ら/彼女らが相手の話を意識して聞くよう、発表のポイントが書かれたカードを使用した。そして、活動において児童に其々役割を与えることで学習に参加する必然性を生む仕掛けづくりを施した。介入としては、それぞれの学年で協同学習を実施し、全20項目からなる質問紙を児童に5件法で回答して貰った。この質問紙は、協同作業認識尺度 (長濱ら, 2009)、英語授業不安尺度 ELCAS (近藤・楊,

2003)、そして、外国語教室不安尺度 FLCAS (Horwitz et al., 1986) の3つの尺度を元に、「協同効用」「個人志向」「方略」「情意」「互恵懸念」および「社会言語」の6カテゴリから構成された。また、これ以外にも児童の振り返りシート、ICレコーダー、そして、パフォーマンステストの実施と動画分析がデータとして収集された。得られた情報を解析した結果、話すこと [発表] のコミュニケーション能力 (方略的能力と社会言語学的能力) の改善と意識の変容が見られた。また、荒井ら (2023) は、学習前と学習中に行った仕掛けづくりにより、「児童は、教師からの暗示的・明示的指導や促進的な相互交流により相手意識をもった発表ができるようになったと思われる」と述べている。

#### 4.4 小学校外国語科における英語スピーキング不安に関する事例的研究—構成的グループエンカウンターの実践と評価— (2023)

仲川・榊原 (2023) の研究は協同学習の名称は使用していないものの、構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter (SGE) という、協同学習の理念に似た概念を用いた研究である。これは「相互交流の中で人間としての生き方を学習する方法であり、カウンセリングの一手法として育ち、発展してきたサイコエデュケーションである」(藤田・西川, 2002, p. 70)。そして、SGEにより、人には安心して自分を表現し、他者が自分を理解して受け入れてくれているという思いが育まれる。仲川・榊原 (2023) は、研究において、外国語科の授業でSGEを用いた授業が児童の英語のスピーキング不安に与える影響について調査した。調査対象者は小学6年生1クラス (男4名、女8名、計12名) だった。4人1組のグループでサイコロトーク (サイコロを振って出た目のテーマについて話す活動) をし、活動中の発話プロトコル、インタビュー調査、質問紙を測定材料とした。また、活動前には授業内で聞いたり話したりする際の約束ごとが確認された。分析の結果、集団メンバーが発表者のミスや発言をフォロー

する様子が見られ、約束ごとがためになった場面が多く見られた。また、仲川・榊原（2023）は、SGEによって話しやすい雰囲気を作られ、安心感が生まれ、これが英語のスピーキング不安を緩和する一助となった可能性があるとしている。実際に、質問紙調査では3分の2の児童の英語スピーキング不安が緩和された結果が見られた。しかし、児童の中には不安が増強したり、変化しなかった者も複数おり、個別対応の必要性も指摘された。

## 5. 考 察

初等英語教育における協同学習で小学生を調査対象にした日本語で書かれた論文には、いくつかの共通点がある。1つ目は、協同学習を実施する際に守るべきルールを児童に提示している点である。例えば、山野（2013）の調査はCLILの実践研究だが、前述した通り、CLILの質が担保されるためには4つのCが遵守される必要があり、このうちの1つに協同学習が含まれる。この研究は概括的に上手くいったことから、児童の協同的な学びが確保されていたことが伺える。また、丸山・赤坂（2019）では、計画当初から協同学習の理論に基づいた外国語活動が行われた。更に、荒井ら（2023）では、発表の良い例、改善すべき例を示したり、相手意識を持つよう、発表のポイントが書かれたカードが準備された。すなわち、仲川・榊原（2023）が述べている、約束ごとが、活動前や最中に児童に伝えられていた。

2つ目の共通点としては、全ての研究が児童の個人差について配慮する必要性を示唆している。まず山野（2013）は、児童の興味や知的レベルに適合したCLIL実践の大切さについて触れている。また、丸山・赤坂（2019）は、下位層と上位群によってスキルの育成方法を変えないといけない可能性について述べている。具体的には、上位群の向社会的スキルの育成には、児童の実態に即したりアクションスキルを使用したり、授業内容を検討する必要がある可能性について言及している。荒井ら（2023）も、事前事後でパフォーマンステストの評価に変化が見

られない児童がいるなど、全員が同じような結果を示さなかった事実について記載している。例えば、ある児童はジェスチャーを用いた発表についてのコメントで、「私はジェスチャーをして発表することができなかったけど、友達がジェスチャーをしながら話していてとても伝わりました」（荒井ら、2023, p. 299）と、ジェスチャーを使用した発表の良さには気づいていたものの、この児童の事後のパフォーマンステストでは変化が見られなかった。このことは、ある行動の良さに気づいても、自身の行動を直ぐ変えるのは難しい児童がいることを示している。更に、仲川・榊原（2023）は、活動後、却って英語スピーキングの不安が増したり、変化が見られなかった児童もいたと述べている。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、協同学習について説明した後、日本語で書かれた先行研究から、初等英語教育における協同学習の実践を考察した。これらの論文は全て概ね好ましい結果を報告している。また、分析の結果、2つの共通点が見られた。1つ目は、協同学習を実施する際、守るべきルールは児童に活動前や最中に示していたことである。2つ目は、児童の個人差を考慮した活動を考案する必要性について言及していた点である。よって、調査から初等英語教育において協同学習を実施する際には、これらを踏まえた実践的な活動を考える必要性が明らかになった。しかし、本研究には課題もある。まず、今回はごく限られた数の論文しか参考にできなかった。更に、どの論文も調査対象者が比較的少人数であったため、より大人数で類似の調査を実施した場合は、違う結果が得られる可能性が否定できない。今後、初等英語教育の協同学習についての実践的な活動がより多く実施され、研究されることで、この分野についての理解がより一層深まることを期待する。

## 引用・参考文献

- 荒井徳久・下鳥美紀・田邊美咲・大場浩正. (2023). 小学校外国語活動・外国語科の「話すこと [発表]」における児童のコミュニケーション能力の向上－コミュニケーション能力の明示的・暗示的指導, ペアやグループによる相互評価および協同学習に基づいて－. *上越教育大学教職大学研究紀要*, 43, 291-301.
- Carlsmith, K. M., & Cooper, J. (2002). A persuasive example of collaborative learning. *Teaching of Psychology*, 29(2), 132-135. [https://doi.org/10.1207/S15328023TOP2902\\_12](https://doi.org/10.1207/S15328023TOP2902_12)
- CiNii Research. (2024年6月17日). CiNii Research について [About CiNii Research]. [https://support.nii.ac.jp/ja/cir/manual\\_outline](https://support.nii.ac.jp/ja/cir/manual_outline)
- Coyle, D., Hood, P., & Mash, D. (2010). *CLIL content and language integrated learning*. Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2010). *Questionnaires in second language research*. Routledge.
- 藤田正・西川潔. (2002). 構成的グループ・エンカウンター導入による他者からの受容感の変容. *奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要*, 11, 69-73.
- Gillies, R. M. (2007). *Cooperative learning: Integrating theory and practice*. SAGE Publications. <https://doi.org/10.4135/9781483329598.n1>
- Gillies, R. M. (2016). Cooperative learning: Review of research and practice. *Australian Journal of Teacher Education*, 41(3), 39-54. <http://dx.doi.org/10.14221/ajte.2016v41n3.3>
- Hashimoto, T. (2020). University students' perceptions of the key elements of cooperative learning. In P. Clements, A. Krause, & R. Gentry (Eds.), *Teacher efficacy, learner agency* (pp. 127-135). JALT. <https://doi.org/10.37546/JALTPCP2019-16>
- Hashimoto, T. (2022). *Motivational effects of variations in sequence of cooperative learning activities* (Publication No. 32682-1067) [Doctoral dissertation, Meiji University]. Meiji Repository. [https://www.researchgate.net/publication/361582188\\_Motivational\\_Effects\\_of\\_Variations\\_in\\_Sequence\\_of\\_Cooperative\\_Learning\\_Activities](https://www.researchgate.net/publication/361582188_Motivational_Effects_of_Variations_in_Sequence_of_Cooperative_Learning_Activities)
- Hashimoto, T., & Kashimura, Y. (2023). University students' perceptions of enjoyment in participating in constructive controversy. In B. Lacy, R. P. Lege, & P. Ferguson (Eds.), *Growth Mindset in Language Education* (pp. 313-321). JALT. <https://doi.org/10.37546/JALTPCP2023-36>
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70(2), 125-132. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.1986.tb05256.x>
- 池田真. (2011). 第1章 CLIL の基本原理. 渡部良典・池田真・和泉伸一(共著), *CLIL(内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たななる挑戦 第一巻 原理と方法* (pp. 1-13). 上智大学出版.
- Jacobs, G. M., & Power, M. A., & Loh, W. I. (2002). *The teacher's sourcebook for cooperative learning: Practical techniques, basic principles, and frequently asked questions*. Corwin Press.
- Jenkins, J. R., & O'Connor, R. E. (2003). Cooperative learning for students with learning disabilities: Evidence from experiments, observations, and interviews. In H. L. Swanson, K. R. Harris, & S. Graham (Eds.), *Handbook of learning disabilities* (pp. 417-430). The Guilford Press.
- Johnson, D. W. (2008). Constructive controversy: *The value of intellectual conflict*. IACM 21st Annual Conference Paper. <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.1298645>
- Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (1999). *Learning together and alone: Cooperative, competitive, and individualistic learning* (5th ed.). Allyn and Bacon.
- Johnson, D.W., & Johnson, R.T. (2002). Cooperative learning and social interdependence theory. In R. S. Tindale, L. Heath, J. Edwards, E. J. Posavac, F. B. Bryant, Y. Suarez-Balcazar, E. Henderson-King, & J. Myers (Eds.), *Theory and research on small groups. Social Psychological Applications to Social Issues*, 4. (pp. 9-35). Springer. [https://doi.org/10.1007/0-306-47144-2\\_2](https://doi.org/10.1007/0-306-47144-2_2)
- Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (2009). *An educational psychology success story: Social interdependence theory and cooperative learning*. *Educational Researcher*, 38(5), 365-379. <https://doi.org/10.3102/0013189X09339057>
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (1993). *Circles of learning: Cooperation in the classroom* (5th ed.). Interaction Book Company.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (1991).

- Cooperative learning: Increasing college faculty instructional productivity* (ASHE-ERIC Higher Education Report, No.4). School of Education and Human Development, The George Washington University.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Stanne, M. B. (2000). *Cooperative learning methods: A meta-analysis*. University of Minnesota Press.
- 近藤真治・楊瑛玲. (2003). 大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討. *JALT Journal*, 25(2), 187-204.
- 栗原慎二・井上弥. (2010). *アセスの使い方・活かし方*. ほんの森出版.
- 丸山浩生・赤坂真二. (2019). 協同学習による向社会的スキルの育成に関する事例的研究：外国語活動に着目して. *上越教育大学教職大学研究紀要*, 6, 15-24.
- McCafferty, S. G., Jacobs, G. M., & Iddings, A. C. D. (2006). *Cooperative learning and second language teaching*. Cambridge University Press.
- 文部科学省. (2017). *小学校学習指導要領(平成29年告示)解説. 外国語活動・外国語編 平成29年7月*. 文部科学省.
- 長濱文与・安永悟・関田一彦・甲原定房. (2009). 協同学習作業認識尺度の開発. *教育心理学研究*, 57, 24-37.
- 仲川雅・榎原範久. (2023). 小学校外国語科における英語スピーキング不安に関する事例的研究—構成的グループエンカウンターの実践と評価—. *上越教育大学研究紀要*, 43, 61-70.
- Slavin, R. E. (1999). Comprehensive approaches to cooperative learning. *Theory Into Practice*, 38(2), 74-79.
- Stevens, R. J. (2003). Student team reading and writing: A cooperative learning approach to middle school literacy instruction. *Educational Research and Evaluation*, 9(2), 137-160. <https://doi.org/10.1076/edre.9.2.137.14212>
- Stevens, R. J., Madden, N. A., Slavin, R. E., & Farnish, A. M. (1987). Cooperative integrated reading and composition: Two field experiments. *Reading Research Quarterly*, 22(4), 433-454. <https://doi.org/10.2307/747701>
- Stevens, R. J., Slavin, R. J., & Farnish, A. M. (1991). The effects of cooperative learning and direct instruction in reading comprehension strategies on main idea identification. *Journal of Educational Psychology*, 83(1), 8-16. <https://doi.org/10.1037/0022-0663.83.1.8>
- Yamano, Y. (2012). *Content and language integrated learning (CLIL) in a Japanese elementary school: A comparative study of a CLIL program in early EFL education* (Master's thesis). Sophia University.
- 山野有紀. (2013). 小学校外国語活動における内容言語統合型学習(CLIL)の実践と可能性. *Eiken Bulletin*, 25, 94-126. [https://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/pdf/bulletin/vol25/vol\\_25\\_p94p126.pdf](https://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol25/vol_25_p94p126.pdf)
- Yang, X. (2023). A historical review of collaborative learning and cooperative learning. *TechTrends*, 67, 718-728. <https://doi.org/10.1007/s11528-022-00823-9>

### Abstract

This study investigates cooperative learning in elementary English education based on a review of literature written in Japanese. Group learning is frequently used in elementary education and is often referred to as cooperative learning, but specific conditions must be met for it to be considered as such. This investigation explains the five elements of cooperative learning proposed by Johnson and Johnson, then searches and analyzes papers on cooperative learning in elementary English education from CiNii Research to look for patterns. As a result, these studies generally showed positive outcomes and revealed two common points. The first is presenting guidelines for the students when implementing cooperative learning. The second is the need to consider individual differences among the students. The study results imply that these two points should be considered when implementing cooperative learning in elementary English education, a finding that can be utilized in future practice.

(はしもと ともこ)

【受理日 2024年11月20日】